

【國府神社・新嘗祭】 (にいなめさい、にいなめのまつり、しんじょうさい)

○宮中で執り行われる新嘗祭は本来は宮家の行事である

「新嘗祭」は、宮中祭祀、のひとつで、大祭。また「祝祭日」

新嘗祭は、天皇がその年に収穫された新穀などを天神地祇(てんじんちぎ)に供えて感謝の奉告を行い、これらの供え物を神からの賜りものとして自らも食する儀式である。毎年「11月23日」に宮中三殿の近くにある神嘉殿にて執り行なわれる。同日には全国の神社でも行われる。

また同日は、昭和23年(1948年)以降に施行された「国民の祝日」に関する法律(祝日法、昭和23年法律第178号)第2条により「勤労をたつとび、生産を祝い、国民が互いに感謝しあう」事を趣旨に国民の祝日の一つとして、「勤労感謝の日」とされている。

○初穂の実る秋に「新嘗祭」が行われる

なお、天皇が即位の礼の後に初めて行う新嘗祭を、特に「大嘗祭」(だいじょうさい、おおにえまつり、おおなめまつり)という。

新嘗祭とは、その年に収穫された新穀(米)を供え、口にすることで収穫に感謝をする行事である。文字通り「新」は新穀を、「嘗」は神様が味わうという意味。「日本書紀」では「飛鳥時代」に行われていた記述もある。秋の実りに感謝する祭りは、稲作を大切にしてきた日本人の心を表す行事。



旧暦では11月の2番目の「卯」の日に行われていた新嘗祭。現在では一般になじみがなくなってきた風習かも知れないが、新嘗祭は11月23日に宮中や「全国の神社」で行われる。その年に神様が与えてくれた恵み、収穫までに関わった多くの人たちの働きに感謝するものだが、新嘗祭も勤労感謝の日も「感謝」の気持ちは同じである。

11月23日までは「新米を慎む」習わしもあり、古くから日本人にとって大切な秋の恵みを「頂く日」。もう一つ、秋の収穫に感謝する行事として「神嘗祭(かんなめさい)」があるが、こちらは新嘗祭より前の10月に「伊勢神宮」にて執り行われる宮中行事。その年に収穫された新穀を捧げて五穀豊穰を祈る。同じく新穀を捧げる新嘗祭では、その後に新穀を「食す」点が主な違いである。



つまり、新嘗祭の時に初めてその年の新米を食す事になるが、「新嘗祭までは新米を食してはならぬ」と考えられるようになった。神より先に食すのは恐れ多い事であり、新嘗祭までは「新米を慎む」のが習わし。

機械や技術の進歩により、現在は早いところで9月頃に新米が手に入るが、昔は人の手で稲穂を刈り天日干しし、お米にする迄2か月程掛かる。つまり9月に稲刈りしても新米が出回るのは11月。ちょうど食べられるのが新嘗祭の頃だった。



また「日本独自の文化」である食事の際に「いただきます」という感謝の言葉もここから来ている。諸説あるが、元は物を頭(頂き)の上に構え神に感謝する言葉「頂き」にある。それが食べる時の挨拶として「いただきます」になったとされる「いただきます」には、2つの感謝の意味が込められており、1つは食事を作ってくれた人や食材を運んでくれた人、育ててくれた人、獲ってきてくれた人への感謝、2つ目は「命をいただく」ことへの感謝です。生類や野菜や米にも命があり、その命を譲ってくれた生き物に尊敬の念を示し、「いただきます」と手を合わせて頭を下げる、この二つの意味があるとされる。新嘗祭をきっかけに、食に感謝する気持ちを改めて意識する事が良い。

○天照大神にひざまつく神々

○神官による初穂を刈り取る風景

○神饌として様々な「山の幸・海の幸」を供物として奉納



【國府神社に於ける「新嘗祭」の進行方法】

●御本殿は「神明造」洋式の古社である

■國府神社の建立：創建1087年は「平安時代後期」。

白河天皇が讓位し上皇になった。翌年、源義家（みなもとのよしえ）が、「藤原清衡」（ふじわらのきよひら）の味方として「清原家衡」（きよはらのいえひら）・清原武衡（きよはらのたけひら）の沼柵を攻め、敗北する。

創建の年の「干支」は「丁卯（ひのと）」

応徳（おうとく）は、永保の後、寛治元年の前。皇紀では「1747年」。1084年から、1087年4月までの期間を指す。

因みに市川三丁目の「春日神社」の創建年代は不詳だが、承応3年（1654）に再建された。稲荷神社は、比較的新しく、元は工場内にあったとされる。

白幡天神社は、治承4年（1180年）建立。

■新嘗祭は、毎年「11月23日・勤労感謝の日」に、

神社御本殿にて午後2時から執り行う。白幡天神社の管轄する神社として「新嘗祭」を執り行う神社は市内でも多くはない。同じ市川三丁目の、稲荷神社、春日神社でも行われていない。

※平安時代から続く「古社」であるが故に宮中行書が執り行われている。

■日時：毎年「11月23日・祭」に執り行う。未（ひつじ）の刻「八つ時」午後2時から執り行う。

■場所：國府神社御本殿にて白幡天神社宮司・神官により挙行。

■内容：正式な儀式作法。

（一）御本殿、奥の院を綺麗に清掃し、式典を挙行する。

（二）全ての「紙垂」を新しい物に取り替える。

鳥居注連縄大、階段下お賽銭箱注連縄小、本殿向拝注連縄大、御本殿注連縄大、奥の院注連縄中。

（三）新しい蠟燭、御神事の為、三宝三台に新しい半紙を敷き「御神饌」をお供える。

①天照御大神に早朝「初穂」をお供える（正式な儀式作法）

②山の幸（各種野菜等）その地で収穫した物なら尚良し。

③海の幸（塩、昆布、鰹節、煮干し等）

④お神酒一対。

⑤御神水、御水器玉串受け皿（玉串をお供えるお盆）

⑥御榊一対。

■準備：御供物購入

①海産物：板昆布（袋入り）、鰹節（パック物）、煮干し（袋入り）

※駅前の湯浅商店等で仕入れるか最悪リブレ京成

②山の幸：各種野菜、果物類。 ※地元スーパーリブレ京成、100均ローソン

③お榊：花屋。

④和菓子：神官用お茶菓子 ※デイリーヤマザキにて購入

⑤白幡天神社へ「玉串料10,000円」と「お車代3,000円」をお渡しする。

■式次第：当日の進行

①神官をお出迎え。タクシー到着をお迎えし荷物を御本殿迄ご案内

②開式の辞：神社総代、若しくは司会者による会式の辞を行う。

□司会：「ご一同様ご起立下さい。」

「只今より、令和〇〇年度、國府神社・新嘗祭、御神事を執り行います。」

「一同礼」「ご着席下さい。」

□神官：「只今より、國府神社様、令和〇年度の新嘗祭を執り行います



○山の幸、海の幸、お神酒、お榊、塩、米、御神水、手前に玉串用三宝木三宝に半紙を敷き図の様にお供え
終了後は神饌お下がりとして木三宝に半紙を敷き図の「撤饌」とし神と共に有り難く頂く事。



○年内最後の神事なので1人でも多く参加する事



- 号鼓 (太鼓の打ち込み) 奥の院 (本殿奥へ神様を降臨の「おお〜」の神下ろしの儀)
- 修祓※ここからは神職の信仰通り行う。(お祓いの際の、御低頭下さい、お直り下さいを繰り返す)
- 祝詞奏上 (のりとそうじょう) ※祭祀により祝詞奏上は内容、長さが異なる。のちに神職が幣 (ぬさ) を持って順番にお祓いをします。
- 最後に「号鼓」し終了。(神官は「おお〜」の神上げの儀)
- 神職はここで「講和」を行う事もある。神道「神々の話」や神社の云われや世間話等を奥ゆかしくご講和頂く。

儀式が終了したら「燭台の蝋燭を消す(火災予防の為必ず行う事!)」※火災が発生多数有り。文化財保護の為、念には念を入れて確認する。

○神社総代、神社役員は社務所へ神職をご案内しお休み頂く事。お茶菓子を添えてお迎えする。

○懇談が終了したら、神官のご都合に合わせて、タクシーを呼び寄せる。ムトウ、市川交通どちらでも構わない。数名で階段下までお見送りをする事。

【神社の唱え言葉の意味】※神社青年部として知っておく事。

神社に参拝するときや神棚を拝む時の唱え言葉。

「祓え給い、清め給え、神かむながら守り給い、幸さきわえ給え」

(お祓い下さい、お清め下さい、神様のお力により、お守り下さい、幸せにして下さい)と唱える。神道では自らの誠い清めが信仰的にも神様に近づくための儀式であり、

「祓い給え清め給え、神ながら守り給え、幸わえ給え」を唱える。

神道では、私たち靈人(ヒト)は、天御中主神(あめのみなかぬしのかみ)や、天照大神(あまてらすおおみかみ)に代表される神々の子孫であると考えられる。

「祓い給え清め給え、神ながら守り給え」にはこの様な意味がある。

- ハ・・・引き合う
- ラ・・・場
- エ・・・移る(映る・写る)
- タ・・・分かれる
- マ・・・受容・需要
- イ・・・伝わるもの・隠・意思・生命
- キ・・・エネルギー・氣
- ヨ・・・新しい・陽
- メ・・・思考する・指向する
- タ・・・分かれる
- マ・・・受容・需要
- エ・・・移る(映る・写る)

■神社「宮司」と「神主」「神官」「神職」の違い。

宮司とは、その神社の責任者を務めている神職のことを指す。神社を一般的な会社に例えると、神職は社員でその中の代表者が宮司ということ。つまり、宮司は代表者なので各神社に一人しかいません。その神社で行なう祭祀の責任者、神社の維持などを行なう人のことを言う。

神道に関わる人たち「神職」のことを神主と呼びます。神主という言葉は、神道・神社の世界に「神主」という職業名は存在しません。神主というのは、神社における役職の名前ではなく、職業としての名前である。

○神官のお祓いの様子



○神官のお祓いの様子

